曇りの日に

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曇りの日に

【Nコード】

N3106F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

彼女とのデートに笠を持って行くべきか持って行かないでおくか。オムニバス小説です。

1 を選択

曇りの日に

「何かなあ」

伊吹強は空を見上げて呟いていた。どうにも天気が悪いのが気になっっているのだ。

彼は今家を出るところである。そのまま彼女の桜井美輪とデートである。

「傘、持って行った方がいいかな」

彼はふと思った。

「一応は。けれど」

それでも迷う。

「降らなかつたらかさばるだけだしな」

まだ降るかどうかはわからない。だから余計に迷ってしまいますのだ。しかし迷っている間にも時間は過ぎる。迷っている時間はなかった。

「よし」

彼は時間に迫られて決断を下した。

「ここはやっぱり」

彼は決めた。そして彼は取った行動は。

- 1 . 傘を持って行く。
- 2 . 傘を持って行かない。
- 3 . 途中でビニール傘を買うことにした。

- 1 . 傘を持って行く。

彼は結局傘を持って行くことにした。黒い大きな傘だ。優に二人は入れそうな程の大きさであった。

「これでいいよな」

彼は傘を持って街を歩きながら待ち合わせ場所に向かっていた。歩いていると天気は余計に悪くなっていく。それを見ているとやっぱり傘をもつて来てよかったと思う。

そうこう思っているうちに天気はさらに悪くなり遂には今にも降りそうな様子になってきていた。そんな中で美輪との待ち合わせ場所に向かった。するとそこにはもう彼女が待っていた。

「御免、待った？」

「いいえ」

美輪はにこりと笑ってそれに返してきた。

「今きたところよ」

「そう、よかった」

「ええ。けれど」

「何？」

彼女の言葉に応えた。

「傘持って来たのね」

「ああ、これね」

彼は自分の傘を見て美輪ににこりと笑ってみせた。

「ちよつとね。天気があれだったから」

「そうね」

美輪はそれを聞いて空を見上げた。もう真っ暗になっていてかなり淀んでいた。

「やっぱり降るわよね」

「そうだろうね」

彼はそれに答えた。

「私傘持ってないのよ」

「そうなの」

「大丈夫だと思ったから。けれど」

彼女は言う。

「危ないわよね」

「うん。けれど僕が傘を持ってるからさ」
「そうね」

強のその言葉を聞いて安心したのかほっとしたような笑みを見せ
てきた。

「じゃあ行きましょう」

「うん。じゃあ」

「ええ」

こうして二人は仲良く並んでデートをはじめた。空は暗いがそれ
でも気のいいはじまりであった。

けれど暫く歩くと。やっぱり心配した通りになってきた。

「やっぱり」

美輪はポツポツときた雨を見て口を波線のように歪ませていた。

「危ないかなって思ったけれど」

「いや、本当だね」

強はそれに応えて言う。

「持って来てよかったよ」

「本当ね」

美輪は心からその言葉に頷いた。本当にそう思えた。

「備えあれば憂いなしね」

「そうだね」

美輪の言葉に頷く。頷きながら傘を開く。

「入る？」

その黒く大きな傘を上に掲げてかわ美輪に問うてきた。

「どうするの？」

「入れてくれる？」

強に顔を向けて尋ねてきた。

「よかったら」

「うん」

その言葉に応える。

「それじゃあ」

「ええ」

美輪はその傘の中に入った。それからデートを再開した。

「ねえ」

美輪は強の横で彼に声をかけてきた。

「何？」

「雨が降ったけれど」

彼女は雨を眺めながら彼に対して言う。

「雰囲気は悪くないわね」

「そうだね」

彼もその言葉に頷く。どうやら傘を持ってきたのは正解であった
ようである。

曇りの日に

完

2006・12・23

2 を選択

2 . 傘を持って行かない

「まあいいか」

彼は決めた。傘は持って行かないことにしたのだ。

傘に目はやったがそれだけでありそのままデートの待ち合わせ場所に向かった。先に進めば進む程天気が悪くなっていくのを感じる。

「これって何か」

不安が高まっていく。

「大丈夫かなあ」

何か今にも降りそうで心配になる。だが何とか待ち合わせ場所までは降りはしなかった。待ち合わせ場所に着くと同時に美輪もやって来た。

「いいタイミングね」

「そうだね」

二人は顔を見合わせて笑った。

「けれどねえ」

しかし美輪はここで不安げな顔で空を見上げてきた。

「大丈夫かしら」

「天気のこと？」

「ええ。何か今にも降りそうだけれど」

その眉を八の字にさせて言うのであった。それを見るだけでどれだけ不安であるのかがわかる。

「どうなのかしら」

「大丈夫だと思うよ」

とりあえず彼はこう言って彼女を安心させた。

「だからさ。行こうよ」

「そうね」

何はともあれ二人は並んで歩きはじめた。だが暫くすると雨がポ

ツポツと降りはじめてきた。

「あっ」

「やっぱり」

強と美輪は思わず空を見上げた。美輪は露骨に嫌そうな顔であった。

「どっしょっしょ」

「どっしょっしょって言われてもね」

美輪に問われてもどうにも考えが浮かばない。傘がないからどうしようもないんじゃないかとさえ思えた。

「うっん」

考えている間にも雨は降ってくる。しかもそれは少しずつ強くなってきた。

「とりあえずさ」

もう考えている余裕がなかった。彼も決断を下した。

「これ、着て」

「これって？」

彼が出してきたのは自分のコートであった。何と自分のを脱いで彼女に手渡してきたのであった。

「あの、強君」

「いいから」

彼は戸惑いを見せる美輪に対して言った。

「これ、雨合羽かわりにしても」

「いいの？」

美輪はそれを言われて思わず問い返した。

「そんなことしたら強君が」

「僕はいいよ」

彼はすつと笑って美輪にそう述べた。

「だって美輪ちゃんが風邪引いたら大変だからね」

「そっなの」

「そっだよ。だからさ」

「わかったわ」

美輪はその言葉を聞いて目を細めてきた。そして次にすっと笑った。

「有り難う」

「いや、御礼はいいよ」

強もそれに笑みを返した。その間に雨は本降りになってきた。強の肩にも雨が降り注ぐ。

「じゃあさ。デートに行く？」

「そうね。けれど」

「けれど？」

「雨が降ってるし」

「うん」

「ここでのデートは止めましょう」

美輪は笑って強に言ってきた。

「止めるってじゃあ何処で？」

「それでね」

そして美輪はさらに言うのであった。強は雨の中でその言葉を待っていた。

「私のアパートに来ない？」

「えっ」

強はその言葉を聞いた瞬間目が点になってしまった。

「あの、美輪ちゃん今何て」

「だから私の家に来ない？」

彼女はまたそう言うのであった。強に言い聞かせるかのように。

「それじゃあ駄目？」

「えっと、いいの？」

二度言われてようやく話が飲み込めてきた。それでやっとまともな問い返した。

「本当に」

「嘘でこんな言わないじゃない。それにこのままだと本当に風邪

引くわよ」

「うん」

これは美輪の言う通りであった。このまま雨に打たれていては風邪を引くのは目に見えている。美輪はそのうえで強に選択を迫る形になっていた。

「どうするの？」

「それじゃあ」

強は戸惑いながらも美輪の言葉に応えた。恐る恐る尋ねるようにして問う。

「いい？」

「ええ、じゃあ」

「うん」

強は頷く。これで決まりであった。

「雨が強くなってきたから。すぐ行きましょう」

強の左手に自分の右手を回してきた。もう話は動いてきた。

「アパートに着いたらね」

「うん」

「何が飲みたいの？」

「何でもいいよ」

強は雨の中で顔を綻ばして言ってきた。

「美輪ちゃんが入れたものなら」

「もう、お世辞が上手いんだから」

そうは言っても悪い気はしない。美輪も気持ちに乗せてきていた。

「じゃあホットミルクね」

「うん、お願い」

二人はそのまま腕を組み合って雨の街の中を急いでいく。そして美輪のアパートの中でデートの続きをするのであった。強は咄嗟の優しさで思わぬ奇貨を手に入れたのであった。

曇りの日に

完

2006・12・24

3 を選択

3・途中でビニール傘を買うことにした。

「よし」

彼は遂に決めた。

「途中で買おう」

何か行き当たりバッタリだがそれが一番いいと思ったのだ。

「降るかどうかなんてわからないしね」

空を見上げて呟く。

「それなら急いで買うこともないし」

そう考えて決めたのだ。そのまま行くことにした。

待ち合わせ場所に向かう途中も天気はかなり悪かった。それどころかどんどん悪くなっていく。彼はその中で次第に不安になっていくがまだ雨が降っていないので買わなかった。

迷っていたせいか待ち合わせ時間に少し遅れてしまった。もうそこには美輪がふくれた顔で立っていた。

「遅いわよ」

「御免」

まずは謝ることになった。とんだ藪蛇であった。

「何してたのよ」

ほんの数分だが美輪はそれでも厳しい。彼女は時間には五月蠅いのだ。

「だから御免で」

「天気も悪いのに。一体何処に行ってたのよ」

「ちよつとね。あれこれ考えていて」

「そうなの。まあいいわ」

美輪の方で話を打ち切ってきた。

「デート、行きましょう」

「うん」

こうしてデートをはじめた。だが歩きはじめたらすぐに雨が降ってきた。

「やっぱり」

美輪は雨が自分の髪にかかったのを見て不機嫌な顔をさらに不機嫌にさせてきた。

「傘、持ってる？」

「いや、ただだけれど」

強はその問いにこう答えた。

「まだってどういふことよ」

「あの、降るかどうかわからなかったからさ」

彼は言う。

「持って来てないし。途中で買うつもりだったんだ」

「そうなの。じゃあ」

とりあえず美輪は辺りを見回した。

「何処かのお店で買いましょう」

「そうだね。けれど」

ここで彼はとんでもないことを思い出した。

「傘ってさ」

「ええ」

何か話がおかしな方向に行く。

「何処で買えたっけ」

「えっ!？」

美輪はその言葉を聞いて瞬間的に顔を顰めさせてきた。それから強に対して言った。

「何言ってるのよ。コンビニでも買えるじゃない」

「そうだったよね」

「そうよ。とりあえずコンビニだけねど」

見回してもこういふ時にないものだ。いつもはつぎつぎとたいまでに見かけるというのに。

「何処かな」

「いいから探してよ」

美輪の声がいらついできていた。

「このままだと風邪引くじゃない」

「そっだよ。けれど」

見回せどどうにも見つからない。何か不安になってきているとこ
ろでやっと一店見つけ出したのであった。

「あっ、ほら」

その店を指差して言う。

「あつたよ、あそこに」

「そっね。だけどさ」

しかしどういいうわけか美輪の不機嫌なのは変わらなかった。

「どうしたの？」

「見てよ、お店の中」

その不機嫌な声で強に對して言う。

「お客さんで一杯よ。カウンターも随分列になってるし」

「あっ」

見てみればその通りであった。中にはかなりの人間がいる。しか
もカウンターは列になっていて随分待ちそうである。

「一つ言っとくれどね」

美輪は強にまた言ってきた。

「私待つの嫌だから」

「嫌なの」

「そっよ、雨でもね。もうこのまま帰ろうかなって思ってるのよ」

「そんな」

その言葉で退路が絶たれた気がした。強はいよいよ進退極まった。
「どうしよう」

ここで彼の頭の中に二つのことが思い浮かんだ。さて、彼はどう
するのか。

4・コンビニの中に入って傘を買う。

5. コンビニには入らずに別の方法を考える。

4 を選択

4・コンビニの中に入って傘を買う。

「そうだね」

彼はやつと結論を出してきた。そして美輪に対して言う。

「ちよつと待つてて。買って来るから」

「コンビニの外も人一杯ね」

美輪はまだ不機嫌な声のままであった。コンビニの外も人が一杯でどうにも雨宿りもできそうになかったからだ。

「待たないからね」

「わかってるよ。けれど行って来るね」

「ええ」

こうして彼は美輪を待たせてコンビニの中へ入った。だがやはり人は一杯でカウンターの列も外から見た通りであった。これはかなり待つことが予想された。

ビニール傘を二つ手に取ってカウンターに向かう。列はさらに伸びていた。

「何でコンビニでこんなに列になるんだ？」

その方がかえって不思議であった。カウンターは二つある筈が何と一方が使えなくなっている。そのうえカウンターにいる店員の手際が異様なまでに悪い。列になっているのはそのせいであった。

「これは」

顔を苦くしているところでまた美輪の顔が思い浮かぶ。だがそれでもカウンターの列は減らない。そうこうしているうちに美輪が行ってしまったのかと不安になる。だがもうここまで来たら並ぶしかなかった。

「ええと」

店員は若い兄ちゃんであった。やけにあたふたとして動きの全ての段取りが悪い。それで時間を悪戯に浪費してしまっているのだ。

やっと強の順番になった。だがそれでも兄ちゃんの手際は悪い。おつりを数えるのでさえも見ている方がイライラする程に時間がかかっている。

「これでいいですよね」

「はい」

強がおつりの額を見て答える。小銭がなく千円を出したのが運の尽きだった。そう思うしかなかった。

何はともあれ傘を買った。そして美輪が待っている場所に行くと「え……………」

もうそこには誰もいなかった。怒って帰ってしまったらしい。

「何てこった」

強は誰もいなくなったその場所を見てついつい言った。言ったところはどうしようもないのだが。

「参ったなあ」

これからのことが大変だと思った。美輪は一旦怒ると後が大変だ。この事態をどうしようかと思ってもどうにも解決策が思いつかない程であった。

強は雨の中一人溜息をついた。こんなことなら最初から傘を持って来ればいいと思ったがそれももう後の祭りである。雨に濡れるのをそのままにがっくりと肩を落としていた。

曇りの日に 完

5 を選択

5・コンビニには入らず別の方法を考える。

「それでどうするの?」

美輪が不機嫌な顔で決断を迫ってきた。

「コンビニに行くの?どうするの?」

「そうだね」

その言葉を受けてまたコンビニを見る。だがやはり人が多くてどうしようもない様子であった。

「止めるよ」

彼はそう決めて美輪に言った。

「やっぱり行かない」

「それはそれでいいけれど」

美輪はそれを聞いて慥然とした声を返す。

「じゃあどうするの?雨は止みそうにないわよ」

「そうだね。じゃあ」

ここでまた辺りを見回した。とりあえず別の方法がないか見回しているのだ。

「いいもの見つけたよ」

「何よ」

「ほら、あれ」

そう言っただ道の方を指差す。そこには一台のタクシーが止まっていた。丁度お客さんを降ろしたところであった。

「あれに乗ろうよ」

「タクシーに?」

「うん、とりあえずね。あれだと雨には遭わないしさ」

「そうね。それじゃあ」

美輪もそれに賛成してきた。こうして二人はとりあえずタクシーに乗って難を逃れることにしたのであった。

その黒いタクシーに乗る。とりあえずはほっと安堵の息を漏らした。すぐに車の中に入った美輪は白いシートの上でとりあえずはハンカチで自分の身体を拭いていた。

「一安心ね」

「そうだね」

強が彼女の言葉に答える。

「とりあえず雨はこれでいいわ」

「うん」

「けれどねえ」

しかし美輪の不機嫌はそれで収まったわけではなかった。それは声ではつきりとわかる。

「あちこち濡れたままよ。服も髪の毛も」

「僕も」

「ハンカチなんかじゃ拭ききれないし。どうしようかしら」

「僕のハンカチ使う？」

そう言っただけ強は自分のハンカチを差し出してきた。青いハンカチである。

「よかつたらさ」

「それだと強君が困るでしょ」

「けれどさ」

「駄目よ。今はいいけれど後で風邪引くわよ」

「だけれど」

「それは強君が使っただけ」

美輪はあくまでそれを受け取るうとしなかった。そしてこう言うてきた。

「いいわね」

「うん、そこまで言うんなら」

彼はその言葉を受けることにした。だがそれでも二人が濡れたままであるというのは変わりがなかった。どちらにしろこのままでは風邪を引いてしまうのは目に見えていた。

その時だった。運転席にいる運転手さんが声をかけてきた。

「それでどうします?」

「えっ」

二人はその言葉にはっとした。それで運転手さんに顔を向けた。

「何処に行くんですか?」

「あっ、そうか」

タクシーに乗っているのだ。だとすれば何処かへ行くしかない。

「ええと」

実は強はそこまで考えてはいなかった。困った顔になる。

「どうしよう」

「それじゃあ」

だがここで美輪が運転手さんに言って来た。

「ホテルお願いします」

「じゃああつちだね」

「はい」

運転手さんが右手を指し示すと美輪はそれに頷いてきた。

「そっちです。じゃあお願いしますね」

「わかったよ。じゃああつちだね」

「ええ」

「あの、美輪ちゃん」

ホテル街に行くように言った美輪に対してそっと声をかける。

「いいの、それで」

「だってこのままだと風邪引くわよ」

美輪はまたそれを言う。

「そんなことになったらお話にならないじゃない。折角のデートな

のに」

「けど」

「いいのよ」

美輪は少し慥然となって言葉を返した。

「私はいいんだから。女の子にここまで言わせないでよね」

「えっ」

「わかったわね」

「う、うん」

話は押し切られてしまった。こうして強は美輪と一緒にホテルに向かうことになった。何がどうなるかわからない。不幸が転じて幸福になる。雨もまた然り。彼は今は雨に感謝したりしていなかったりであった。

曇りの日に

完

2006・12・26

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3106f/>

曇りの日に

2010年10月8日15時58分発行